The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「畿内の四至」と各都城ネットワークから見た古代の領域認知 ： 点から線（面）への表示
Author(s)	佐々木, 高弘
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1986, 20, p. 21-38
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56476
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「畿内の四至」と各都城ネットワークから見た古代の領域認知

——点から線（面）への表示——

佐々木高弘

I はじめに

歴史地理学の仕事の一つは、過去の地理を復原することであり[1]、つまりは人間の過去の地理的行動を理解するということにある。しかし多くの場合、記述された人間行動は全体の行動の一部でしかなく、（それは表層部分と言えるかもしれない。）それゆえ一層困難な作業にならざるを得ない。そこで歴史地理学の場合、歴史学や考古学の史料や遺物に限定される立場と違って、色々な手法を使い説明しようとする。それが歴史地理学の独自性の一つでもあり、とりわけ古代という史料や遺物に限界のある時代においては、有効であると思われる。

本稿では、そのいわば学際的立場をとっている歴史地理学の利点を更に拡張する意図もあって、行動科学の成果の導入を試みる。この試みは、近年の欧米における環境認知研究[2]などに見られる行動地理学のアプローチである。日本においてもこのアプローチが見られ始めている。歴史地理学では、第27回歴史地理学会大会の共同テーマが[3]、古代に限れば、千田稔[4]、山田安彦[5]らの研究がある。これら研究を行動地理学として一括できるのかどうかは、議論のあるところであるが[6]、ここでこの点を論述する余裕もなく、また行動地理学とは何かと説明する紙巾もない。そこで筆者は、主に J. R. Gold（1980）の著書[7]を参考に行動地理学をとらえている点を先に述べ

ておく。論を進めるうちに行動地理学的アプローチがいかなるものか紹介できるつもりであるが、あくまでもそれはその一部でしかない。

本稿の行動地理学的アプローチの導入の特徴は、先に述べた記述された行動を観察された行動で補おうとする点にある。表層部分でしかない史料の行動を内部構造から見てみようとするわけである。その記述された行動の事例として、『日本書紀』に見られる「畿内制」を対象とする。

II 「畿内の四至」

畿内制に関する史料は、『日本書紀』の大化二年の記事に初見する。大化改新の詔の四ケ条の新制の其二として、「初めて京師を修め、畿内国司、郡司、関塞、斥候、防人、駅馬、伝馬を置く、及び鈴契を造り、山河を定めよ。」[8] とあるのがそれで、畿内つまり王城の地としての領域を示すものである。「畿内の四至」とは、この領域の範囲を示したもので、「凡そ畿内は、東は名墾の横河より以来、南は紀伊の兄山より以来、西は赤石の櫛淵より以来、北は近江の狭々波の合坂山より以来を畿内国と為す。」[9] とある。

この「畿内制」については従来より多くの研究が行われ、特に歴史学においては、大化改新が存在したかどうかを議論する上での、重要なポイントの一つとなっている。その議論は詔の読み方、畿内の四至の性格、後の四畿内との比較、中国の畿内制との比較などにより、この畿内制実施の時期が考察されている。[10] 地理学においては、藤岡謙二郎が現代の近畿圏との対比を行い、[11] 伊達宗泰は考古地理学の立場より、畿内とは古代社会においてどのような地域であったのかを考察している。[12]

この大化二年の「畿内制」の特徴は、四至で領域を示している点である。しかしこの四至で表わす畿内も後の浄御原令（689年）で「四畿内」という国単位の表示に変る。[13] この〝点〟から〝国〟単位への領域表示の例は中国にも見られ、古代日本ではこれを模倣したのではないかと説明される場

合が多い。しかしなぜ〝点〟から〝国〟単位へ表示が変わったのかは、どのようにして当時の人々が領域というものを認知していたのかという観点からの説明でなくてはならない。先述したように、過去の記述された人間行動は、それが全体の表層部分にすぎないため、理解し難い点がある。この「畿内制」においては、〝点〟での表示がそうであろう。というのは、通常我々が領域区画を考えた場合、〝線〟での表示を思い浮べるからである。

本稿では、この記事を領域行動全体の一表層部分としてとらえ、領域行動に関する行動科学の成果より説明を加え、古代の人間集団がどのように領域を認知していたのかという点について論じる。

III　ネットワーク認知

領域行動を行動科学では territoriality（なわばり行動）と呼ぶが、それらの研究から次の三点が基本行動として挙げられる。第一に、領域というものは侵入者に対して防衛できるものでなくてはならない[14]。第二に、他者が認知できるもので表示せねばならない[15]。そして第三に、領域というものは、場所と道のネットワークによって認知されている[16]。という三点である。本稿ではこのうち、第三のネットワーク認知という観点より、〝点〟で示す領域の説明を行いたい。

ネットワーク認知について少し述べておく。比較行動学者の P. Leyhausen は territoriality について次の様に書いている。「鳥 (songbird) は全体の領域を展望でき、侵入者に反応できるため、確固と範囲を定めたテリトリーを持つ。しかし、哺乳動物 (mammals) は対照的に領域を展望できる機会を持たないので、しばしばテリトリーは不明確となる。それらのテリトリーは場所と道のネットワークであり、確固たる境界 (boundary) は持たないのである[17]」。地理学においては、既に Y. F. Tuan (1976)[18] や J. R. Gold (1982)[19] がこれを引用している。Y. F. Tuan は、場所 (place)、

道（road）について次の様に述べる。「動物は時々止まりながら一本の道に沿って歩くとする。動物は生物学的要求（休息、飲食、生殖、etc.）のために立ち止まる。そして止まった地点が動物にとって守るべき中心地であり、それが場所なのである[20]」。このように領域というものを、場所（place）、道（road）、領域（territory）という三つの関係から見ることができる。この三つの関係から、古代国家の境界を〝点〟で表すという不明確な領域を説明できないであろうか。

この place-road-territory という動物の領域認知を人間へ類推するには、スケールやステージがあって問題はあるが[21]、従来の古代国家の都城・交通路の復原図などを見ると、この三つの関係が明白に出ていると思われる。例えば場所とは、古代国家レヴェルでは、都城・国府・郡家・駅家であり、それらを結ぶ官道が道となる。これらが網状に領域内を走り、領域を出る地点が境界点として表示されたのではないか。そしてこれらの場所と交通路は有機的に機能しており、場所の配置が変われば交通路も変化し、そして境界にも影響を与える関係にある。実際、日本の古代国家においては、都城の変遷が激しく、そのたびにこのネットワークが変化し、そして領域の表示も変化したのではないかと思われる。

次にこのネットワーク認知の観点より、各都城のネットワーク図を描き、四至との関係を見、〝点〟での領域表示から〝国〟単位の領域表示へと変遷する過程を見、ネットワーク認知であったがゆえに、〝点〟で領域表示を行っていたということを、その後の四畿内への変化を含めて論述する。この都城と交通路の変化が境界の表示に影響を与えている点を図で示すことができれば、ネットワーク認知と〝点〟の領域表示の関係が明らかにできると考えられる。

IV　各都城ネットワークと四至

日本の古代国家は都城をいくつもの地に持った。都城が変遷するごとに

ネットワークも変わるため、都城毎のネットワークを想定する必要がある。しかし、都城が変わってもネットワークは大きく変わらないと考えられる場合もある。例えば、飛鳥京・藤原京は古代国家発祥の地といわれる飛鳥地方にあったし、また平城京・恭仁京、そして長岡京・平安京も同じネットワークとして描くことができる。これらをまとめると、1.飛鳥・藤原京ネットワーク、2.難波京ネットワーク、3.大津京ネットワーク、4.平城・恭仁京ネットワーク、5.長岡・平安京ネットワーク、と5つのネットワークに分けられる。

なおネットワークは、藤岡謙二郎編『古代日本の交通路Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ[22]、』、岸俊男[23]、足利健亮[24]、等の従来の成果より復原を行う。また細かい官道については、まだ議論の余地が多く、ここでは都城と四至を結ぶ官道を中心に図化する。

a　飛鳥・藤原京ネットワーク（第1図）

最初に飛鳥・藤原京ネットワークをとりあげた理由から説明せねばならない。なぜなら、問題とする「畿内の四至」は646年に難波京から発せられたからである。しかし本稿では先述したように、領域行動全体より見ているわけで、この年に初めて領域が認知されたわけでもなく、また、この記事自体の信憑性に問題もあり、とりあえず大化二年にこだわらずに、論を進めたい。

第1図のネットワークによると、都城から出た官道がいずれも四至を通過していることがわかる。「赤石の櫛淵」は山陽道の地形的狭隘部、「兄山」も南海道が紀ノ川河谷に沿って紀伊国にむかう途中の狭隘な場所、そして「合坂山」は、東山・北陸道が近江に出るところで、周辺の山にくらべて少し低く、その部分が狭くなっている。また「名墾の横河」は、宇陀川河谷を名張盆地へぬけ出たところで、いずれも地形的に変化を見せるという特徴を持つ。

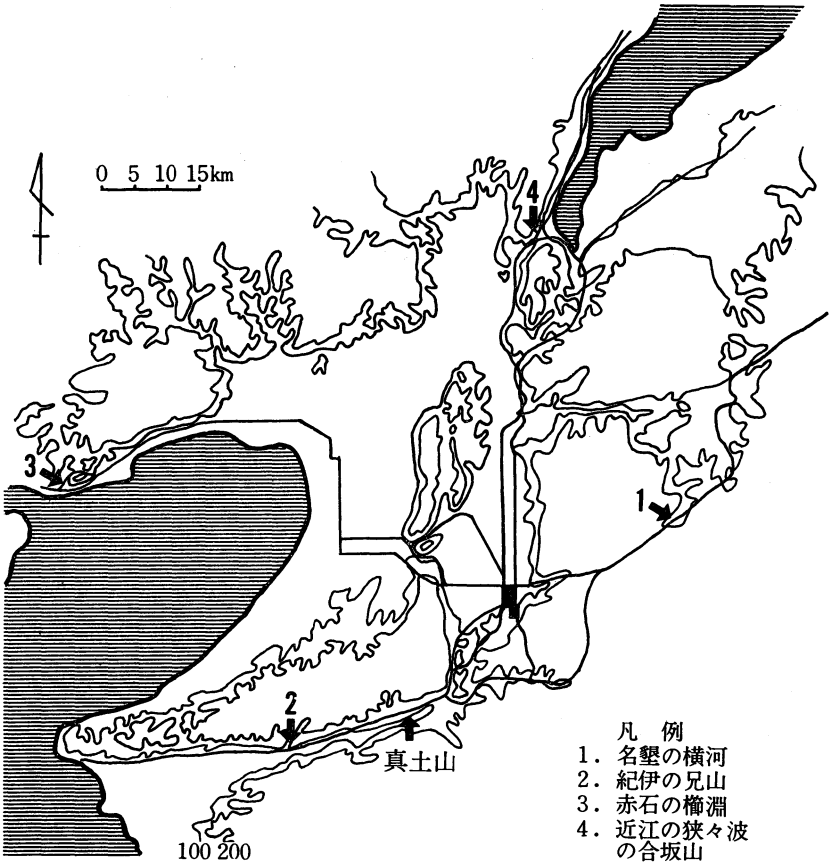

図1 飛鳥・藤原京ネットワーク

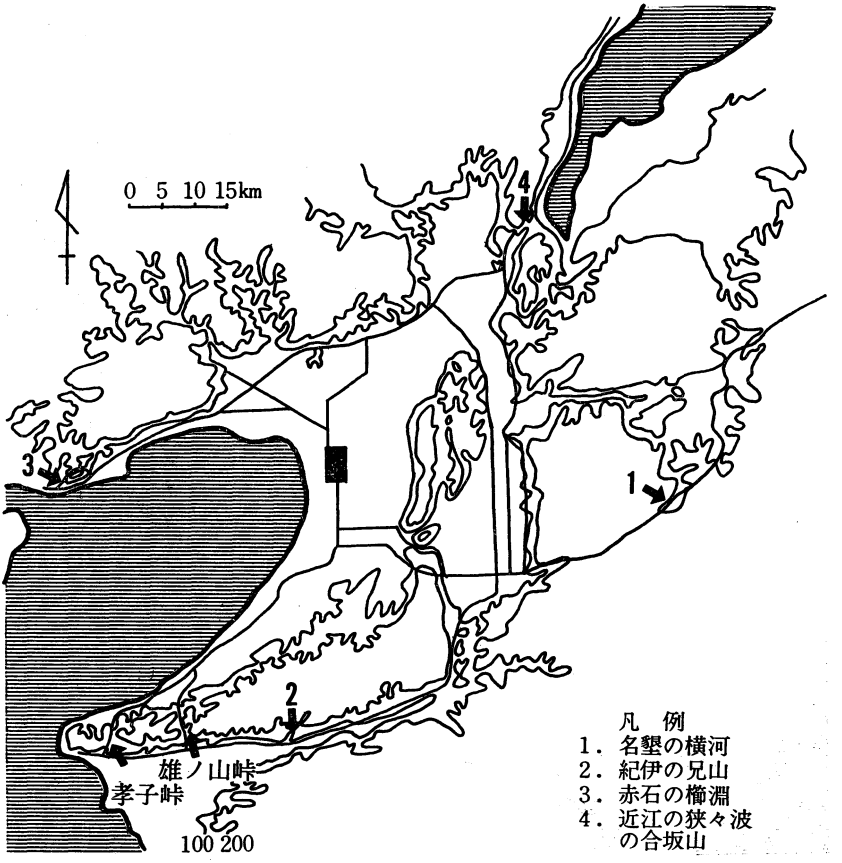

図2　難波京ネットワーク

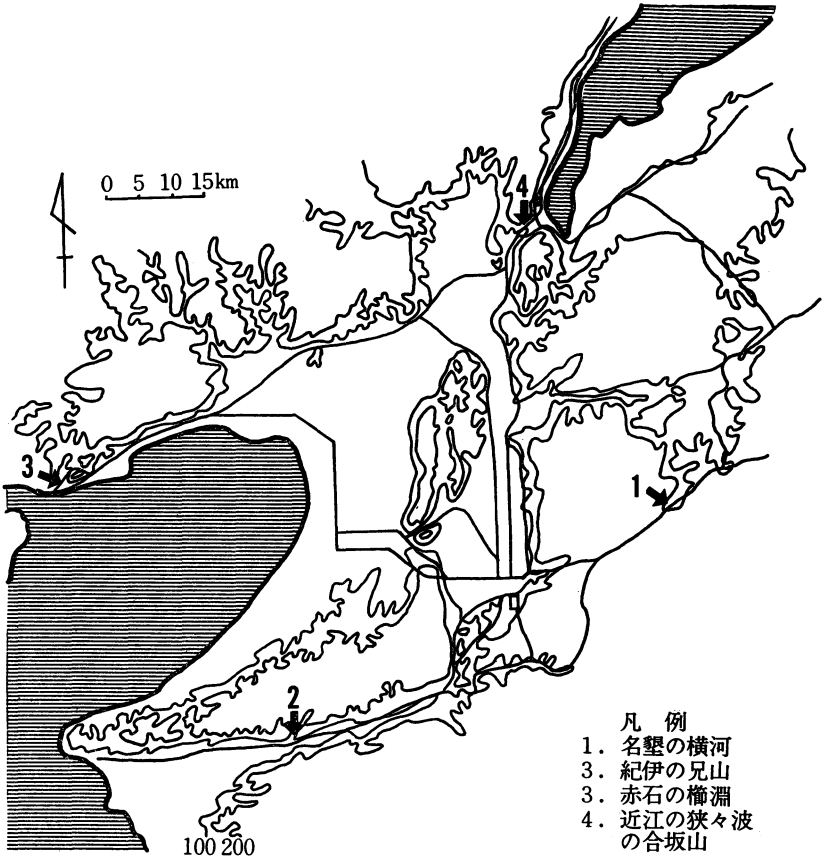

図3 大津京ネットワーク

b　難波京ネットワーク（第2図）

難波京からのネットワークを図化すると第2図のようになる。これより次の点が指摘できる。まずは山陽道・北陸道、東山道は「櫛淵」・「合坂山」をそれぞれ通過しており、領域表示としての役割を果している。しかし南海道はわざわざ大和に入らず、直接南下して孝子峠・雄ノ山峠へ向ったとすれば[25]、「兄山」はその機能を果たさなくなる。さらに東海道が「合坂山」を越えての東山道と途中まで同じルートをとると考えた場合、「横河」も不要となる。しかしこの当時の飛鳥の重要性を考えた場合、この地域を素通りできるとは考えられない。そうすると「兄山」、「横河」は意味を持ってくる。それでも難波京を中心に考えた場合、やはり孝子峠・雄ノ山峠越えが紀伊国へ出る最短距離であり、またそれならなぜ南限をこの地点に選ばなかったのかという疑問が生じる。こう考えるとようするにこの時代直接南下ルートがまだ開発されていなかったのか、それともこの記事が大化二年のものではなかったのか。少なくとも、難波京を中心とした領域認知ではなかった。

c　大津京ネットワーク（第3図）

大津京を語る場合、当時の政治的問題や時代背景を無視できないのは周知のことであるが、ここでは図化されたものから論ずるにとどめる。

第一に、大津京は畿外にあって王城の地「畿内」という定義をくずしている。しかし四至との関係は畿外とはいえ、山陽道・南海道は「櫛淵」・「兄山」を通過しており、その機能を果す位置にある。「合坂山」が従来の北端でなく西に対するといった形をとる。「横河」は壬申の乱の記事で見えており、駅家もまだあったと思われ[26]、このルートに官道があったと考えられる。「合坂山」のみが北端でなくなった点が問題となるが、北への防御点としては北陸道に愛発、東山道に不破が考えられる。しかし「畿内の四至」の外に都城があるという絶対的な問題は解消できず、この時より

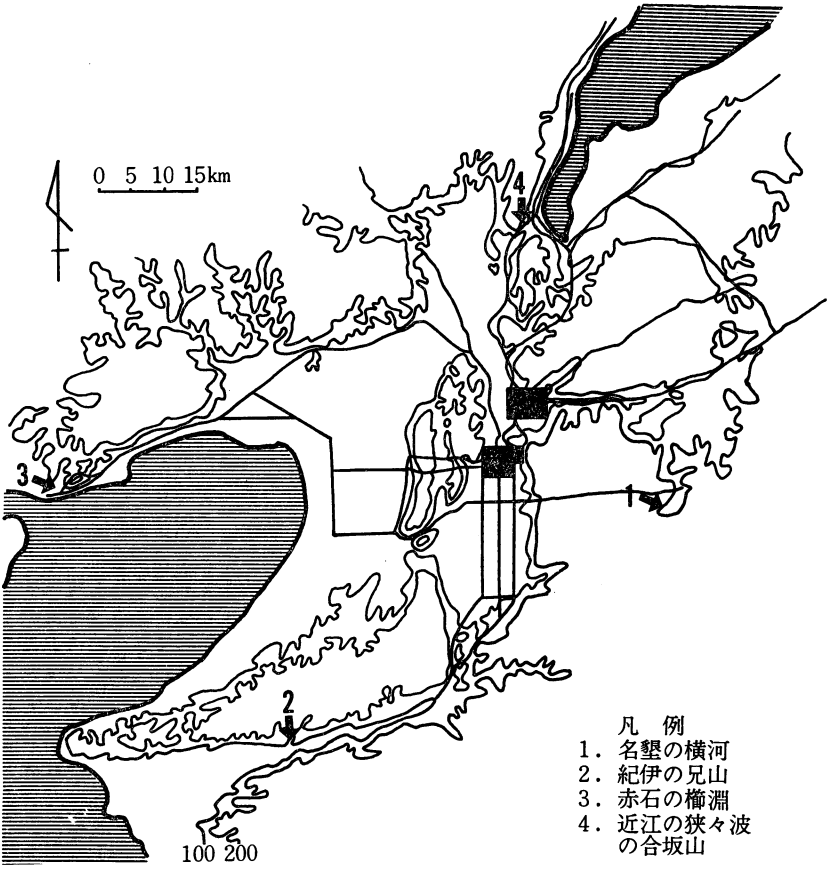

図4　平城・恭仁京ネットワーク

従来の畿内制とは大きく変わって来ているという事が指摘できる。

d　飛鳥・藤原京ネットワーク（第1図）

再び第1図のパターンに戻る。ここで重要なのは689年浄御原令の四畿内制である。服部昌之もこの時代を国の領域画定時代としている。[27] また足利健亮は畿内国成立が天武期と見られる点、及び『日本書紀』天武8年8月11日是月の「初めて関を龍田山、大坂山に置く。難波に羅城を築く。」、天武8年末「紀伊国伊刀郡」の記事から、「兄山」から真土山に南端が後退していると指摘する。[28] これらの点よりこの時期あるいは大津京の時期より畿内制が大きく変化している過程がわかる。四至との関係は、「兄山」以外は特に「四畿内」の範囲を大きくはずれたものはない。問題は領域表示が〝点〟から〝国〟単位に変わった点である。特にこのネットワーク・パターンは以前にもあるだけに、要因は意志決定の主体側における何らかの変化（例えば領域にとって何が必要とされるかの価値体系）を考えるべきであろう。

e　平城・恭仁京ネットワーク（第4図）

平城京に都が移ってからの交通路の変化で大きいのは東海道である。そうすると「横河」は place-road-territory の関係からいうと、領域表示の役割がなくなる。また東山道は「合坂山」を通らずに近江国府に出たとするなら、「合坂山」の北限としての絶対性はなくなる。さらに指摘できるのは、710年に平城京に移り、784年に長岡京、つまり次のネットワーク・パターンになるまでに、都は740年に恭仁京、743年に紫香楽宮、744年に難波京、再び745年に平城京と遷都を繰返している点で、恭仁京・平城京はよいとしても、紫香楽宮は畿外となり再び大津京の時と同じ問題が生じる。難波京の場合は前述のパターンとなる。その他の動きとしては、716年に「五畿内」、732年「四畿内二監」、740年「四畿内」、753年「五畿内」とな

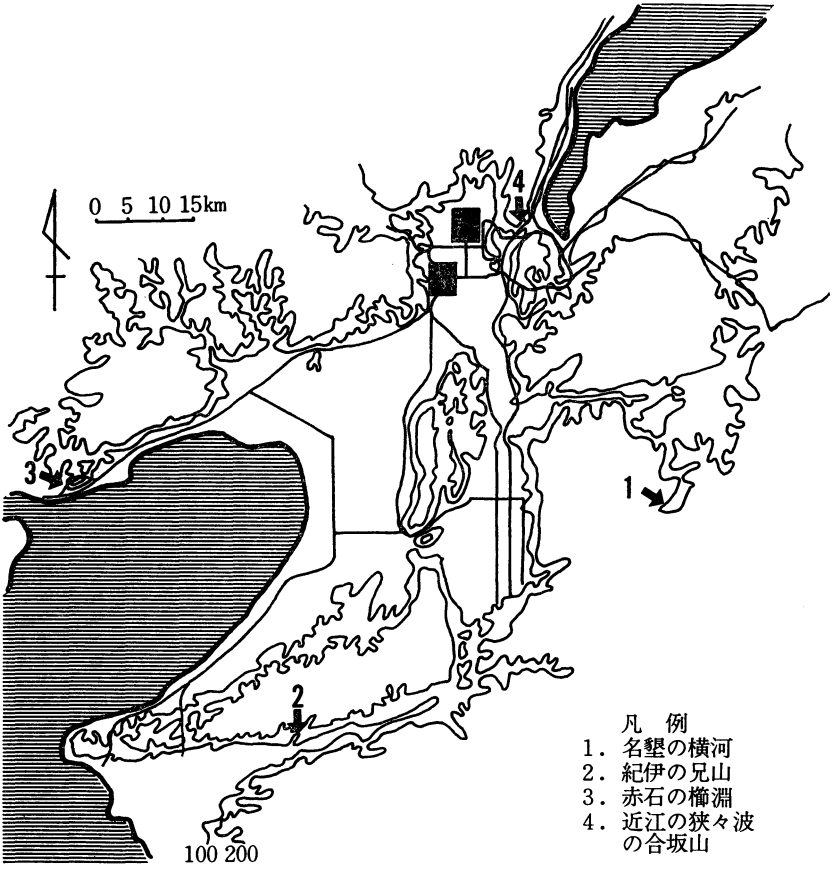

図5 長岡・平安京ネットワーク

り、国郡制の確立期といえるであろう[29]。まとめると、領域表示としての役割は、「兄山」・「櫛淵」が有効、「合坂山」も唯一の北限とはいえないが有効、「横河」は官道からはずれ無効となる。

f　長岡・平安京ネットワーク（第5図）

784年に長岡京、794年に平安京、その間に三関の廃止記事が見える（789年）。これらから発せられる交通路で、大化の四至を通過するのは山陽道の「櫛淵」、東海・東山・北陸道の「合坂山」の二つで、「横河」は平城京の時代より無意味（中央から見た場合）、「兄山」も駅制の変遷過程より見て南海道は河内・和泉を通ったと思われ無意味となる。次に指摘できるのは都の位置である。それは、あまりにも北限である「合坂山」に近いことである。これは防御点としては近すぎ、また都を中心とする畿内の定義からはずれてしまうのである。ここでも当初の畿内の概念が修正されていっているのがわかる。まとめると「横河」・「兄山」が無意味、「合坂山」が都城に近すぎ、そして「櫛淵」は有効である。

都城と交通路のネットワークの変化が境界表示に影響を与えていることが、四至畿内から四畿内への移る過程で、四至をネットワークが通過しなくなる様子から明らかにされた。またこのネットワーク認知から見ると、「畿内の四至」は、飛鳥地方を中心とした領域認知であることもわかった。本稿では、改新の詔が存在したのかどうかを議論する目的は持たないが、ここでいえるのは、大化二年に孝徳宮より実際に出されていたのなら、1.大化前代の飛鳥を中心とした領域のイメージを持って意志決定を行ったために四至が選ばれた。2.和泉より紀伊に出る道が開発されていなかった。もし後の作為とするのなら、dの飛鳥・藤原京ネットワークの時代と言うことになる。つまり天武期か持統期の可能性が出てくる。このいずれかの時代のものであるわけであるが、〝国〟単位で示す「四畿内」が持統期の

ものであり、どちらが先行するのかということは、点と線（面）での領域表示の性格を明らかにすれば、この問題を解く手掛りとなるかもしれない。

V　点と線（面）の領域表示

点での領域表示が面でのそれに先行するのであれば、先のネットワーク認知の見方と嚙合せることによって、aの飛鳥・藤原京ネットワークで認知されたものと考えられる手掛りとなる。

「畿内の四至」のもう一つの疑問点は、なぜ四地点表示なのかということである。ところがこの四点で示す領域は世界の伝統的社会[30]において見られる[31]。Y. F. Tuan はこの空間を mythical space と呼び、「経験的に知られた地域の周辺にある不完全な知識のぼやけた領域」と定義する[32]。そしてこの四方位にのびる空間は、身近な空間の拡大概念であり、例えば中国では屋根瓦にもコスモスがあり、その概念は家、町、帝国へと拡大される[33]。つまり広い地域の知らない部分を身近な地域概念に当てはめ、更にそれをシンボリックな意味[34]を通して間接的に知ろうともするのである[35]。古代日本においては、飛鳥地方を中心とした四方位にのびるネットワークがこの mythical space の骨子であったと思われる。

次にこの点での領域表示がどのようにして線（面）に発展するのか。古代日本においては浄御原令で「四畿内」になったとされるが、この時期のネットワークの中心はやはり飛鳥地方で、藤原京のできる時期でもある。先の身近な地域の例を藤原京にして考えてみると次の様な点が指摘できる。条坊プランはこの藤原京より確立されたと考えられるが[36]、この条坊プランというのは都城をある一定の地域、つまり面でとらえようとするものである。それ以前の宮都はどちらかといえば点としての建築物であり、先の拡大概念が時期的に一致する。この一致は支配者側のある必要に基づいている。それは土地と人民を数量的に掌握支配しようとするもので[37]、当然各地域からの詳細な情報の獲得によるものである。また天武期が律令制の確立

期（条里制・国郡制・直線国境[38]はいずれも面での認識に基づくものである。）とされるのとも一致する。

このように四至での表示がぼやけた領域であり、四畿内がよく情報をあつめた掌握された領域、また点での領域が神話的で、面でのそれが実際的と考えられるのならば、四至の畿内は、四畿内に先行するものと考えられる。

VI 結　　論

ネットワーク図と四至との関係から、この四至の領域表示は、飛鳥・藤原京ネットワークのものであることがわかった。しかしこのネットワークは大化改新をはさんで前後2回あり、どちらの時代のものであるかは、本稿の目的とはしないとしたが、点での領域表示が面でのそれに先行することを述べ、大化前代の飛鳥地方を中心とした領域認知[39]であるという可能性も論じた。

D. Harvey の言うように「説明の目的は、予期せぬ出来事を予期される出来事に作り変えることとして、奇妙な事象を自然で正常な事象に改めることとして考えることができる[40]」とするならば、以上の様に史料に限界のある古代において、記述された行動を観察された行動の一表層部分として見ることによって、幾分かは領域を点で表示するという奇妙な事象が説明できたのではないかと思う。

J. R. Gold は行動地理学の研究テーマを人間におき、そしてその人間の行動は認知プロセスを媒介として行われるとした[41]。その認知プロセスであるが、R. M. Downs は、実在的環境→情報の知覚→知覚者の価値体系→環境のイメージ形成→意志決定→実在的環境というフィードバック・ループで考える[42]。つまり人文景観というものは、その景観をつくった個人または集団の認知プロセスにもとずく意志決定の生産物なのである[43]。この観点より考えると、四至畿内にしろ四畿内にしろこれらの認知プロセス（領

域認知）にもとずく意志決定の生産物であるわけで、これらを理解するにはこの古代の領域認知が重要となってくる。特にこの場合、同じ実在的環境であり、また同集団であることから、知覚者の価値体系というものが変数となる。例えば同じ環境下でも狩猟民・農耕民・都市の住民では、生きていくうえでの環境から得る情報は全く違うわけで[44]、当然彼らの作り出す景観も違ってくる。畿内制の場合は、国家を経営していく上での必要（need）が大化の頃と持統・天武の頃とでは違っていたと考えられる。これはある意味では一つの目的達成プロセスの出発と到達と考えられる。律令制を行う上で領域表示という必要が持上がってきた。そこでとりあえずそれ以前の領域のイメージにもとずいて四至で表わした。それが条里制・都城制・国郡制が整っていく中で、国単位の表示という通常我々の考える〝面〟での領域認知に到達したのではないか。

この様に領域認知というテーマを我々の歴史の中で考えた場合、この時代は一つの大きな転換期であったと思われる。

注

(1) 藤岡謙二郎、『日本歴史地理学序説　増補版』、塙書房、1962、14頁。

(2) SAARINEN, T. F. and SELL, J. L.; "Environmental Perception", Progress in Human Geography 4, 1980, pp. 525-548.
SAARINEN, T. F. and SELL, J. L.; "Environmental Perception", Progress in Human Geography 5, 1981, pp. 525-547.
SAARINEN, T. F. SELL, J. L. and HUSBAND, E.; "Environmental Perception", Progress in Human Geography 6, 1982, pp. 515-546.

(3) 「空間認知の歴史地理」が共同テーマとなり古今書院より1985年に『歴史地理学紀要27』としてまとめられている。

(4) 千田　稔、「古代の空間構造」、奈良女子大学地理学研究報告、1978、40—58頁。同、「地理的『場』の始原性を求めて：記号論的アプローチ」、人文地理32—1、1980、47—62頁。

(5) 山田安彦、「位置選定の始原的要因——知覚的歴史地理学への準備として——」、『西村嘉助先生退官記念地理学論文集』、1980、666—671頁。他。

(6) 若林芳樹、「行動地理学の現状と問題点」、人文地理37—2、1985、pp. 52—70。

(7) GOLD, J. R., *An Introduction to Behavioural Geography*, Oxford University Press, 1980.

(8) 『日本書紀』、新訂増補国史大系、第一巻後篇、吉川弘文館、224頁。

(9) 上掲、225頁。

(10) 関　晃、「畿内制の成立」、山梨大学学芸部研究報告5、1954、61—67頁。
曽我部静雄、「日中の畿内制度」、史林47—3、1964、35—58頁。
上田正昭、「畿内及び近国の歴史的考察」、京都大学近畿圏総合研究会編『近畿圏』所収、鹿島出版会、1969、11—21頁。
長山泰孝、「畿内制の成立」、岸俊男編、『古代の日本5』所収、角川書店、1970、231—245頁。

(11) 藤岡謙二郎、「近畿圏と畿内圏との対比」、地理13—11、1968、12—17頁。同、「近畿圏の形成とその歴史地理学的分析」、上掲『近畿圏』所収、1968、25—36頁。

(12) 伊藤宗泰、「畿内とは——考古地理学の立場から——」、ヒストリア77、1977、25—36頁。

(13) 持統六年（692）四月にはじめて畿内が四国をもって構成されていることを表す四畿内の語があらわれ（『日本書紀』）、これ以降、四畿内の表現が用いられる。

(14) BARNETT, S. A., *'Instinct'* and *'Intelligence': The Science of Behaviour in Animals and Man.* 伊谷純一郎、他訳、『動物と人の行動』、みすず書房、1967、135頁。

(15) ROBERT, S., *Personal Space: The Behavioral Basis of Design.* 穐山貞登訳、『人間の空間』、鹿島出版会、1972、76頁。

(16) LEYHAUSEN, P., "Dominance and Territoriality as Complemented in Mammalian Social Structure" in ESSER, A. H. (ed) *Behaviour and Environment: The Use of Space by Animal and Men.*

(17) *Ibid.*, p. 26.

(18) TUAN, Y. F., "Humanistic Geography", Annals of Association of American Geographer 66-2, 1976, pp. 266-276.

(19) GOLD, J. R., "Territoriality and Human Spatial Behaviour", Progress in Human Geography 7-4, 1982, pp. 44-67.

(20) 注(18) pp. 268-269.

(21) 注(19) pp. 47-50.

(22) 藤岡謙二郎編、『古代日本の交通路』、大明堂、1978、Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ。

(23) 岸　俊男、「古道の歴史」、『古代の日本』5、角川書店、1970、93—107頁。同、「大和の古道」、『日本古代文化論攷』、吉川弘文館、1970、377—414頁。

(24) 足利健亮、『日本古代地理研究』、大明堂、1985。

(25) 上掲、272—276頁。

(26) 『日本書紀』天武天皇元年壬申。前掲注(8)、311頁。

(27) 服部昌之、「8世紀における日本の地方行政区画」、浮田典良・谷岡武雄編『歴史地理学プロシーディングス』所収、古今書院、1982、22—31頁。

(28) 足利健亮、「下ツ道の拡がりとうつろい」、環境文化40、1976、12—29頁。

(29) 注(27)。

(30) ここでいう伝統的社会とは、古代中国・ギリシア・インド・西欧、またインディアンなどの未開民族も含む。

(31) TUAN, Y. F., *Space and Place: The Perspective of Experience*, Edward Arnold, 1977, p. 99.

(32) *Ibid.*, p. 86.

(33) *Ibid*, p. 100.

(34) 四方位は神や動物に置換えられる。

(35) HALLOWELL, A. I., *Culture and Experience*, University of Pennsylvania Press, 1955, p. 187.

(36) 松原弘宣、「藤原京より平城京へ」、『古代の地方史』3 所収、朝倉書店、1979、173—200頁。

(37) 服部昌之、『律令国家の歴史地理学的研究』、大明堂、1983、442—453頁。

(38) 上掲、382—422頁。

(39) 領域表示と領域認知の区別は、認知は表示に先行するという点で、つまりここでこのことを問題とするのは、領域認知が飛鳥を中心としていても、表示行動は難波京ネットワークでもありうるということである。

(40) HARVEY, D., *Explanation in Geography*, Edward Arnold Ltd., 1969. 松本正美訳、『地理学基礎論』、古今書院、1979、15頁。

(41) 注(7) p. 8.

(42) DOWNS, R. M., "Geographic Space Perception; Past Approaches and Future Prospects", Progress in Geography 2, 1970, pp. 65-108.

(43) NORTON, W., *Historical Analysis in Geography*, Longman, 1984, p. 79.

(44) KAPLAN, S., "Cognitive Maps in Perception and Thought", in DOWNS, R. M. and STEA, D. (eds) *Image and Environment*, Aldine, 1973, pp. 63-78. 吉武泰水監訳、『環境の空間的イメージ』、鹿島出版会、1976、71—88頁。

付記　本拙稿を故藤岡謙二郎先生の御霊前に捧げることができれば幸いである。

(大学院後期課程学生)